

楊正泰校注

天下水陸路程・天下路程図引・

客商一覽醒迷

山根 幸夫

本書は復旦大学の楊正泰教授が、史部・地理類・紀程・路程の属の三書に、校訂を施し、注釈を加えたものである。「三書」と云ったが、本当は三書ではなく、二書である。何故なら、原本では『天下水陸路程』と『客商一覽醒迷』は合刻された一本で、二本ではないからである。

楊氏によれば、『客商一覽醒迷天下水陸路程』とは、国内では佚失すでに久しい珍貴の凶書で、孤本が山口大学図書館に収蔵されている。近年来、明代の交通と経済を研究していたので、私はずっとこの種の文献と凶籍を捜求していた。一九八九年一〇月、私は日本で学術交流活動に参加した時、茨城大学教授鶴間和幸氏に此の書の複印を依頼した。一九九〇年一〇月、鶴間教授ら一行がわが国を訪問し、遂に此の書の複印が私に贈られた。学界の同好の士は、この事がわかって後、多くの朋友が貸与を求め、更に多くの朋友は、私にこの書を整理して出版することを提言

した。現在読者の面前に在るのは、この書を複印した整理本である」と述べている。

因みに、楊氏が「孤本」とされる『客商一覽醒迷天下水陸路程』は、もともと徳山藩毛利家の棲息堂の旧蔵書で、山口大学に入ったものである。全八巻七冊の袖珍本である。この書については、既に斯波義信氏が「新刻客商一覽醒迷天下水陸路程」について」と題する詳細な解題を、『森三樹三郎博士頌寿東洋学論集』（一九七九・一二）に発表している。或いは、楊教授も斯波氏の解題を見て、本書が山口大学に収蔵されていることを知られたのであるまいか。然りとすれば、楊教授は「前言」でその旨を注記された方が好かつたのではないかと思われる。

本書は、各頁上段に『客商一覽醒迷』、下段に『天下水陸路程』を合刻したものである。楊教授は出版に当って、印刷の都合上、両書を切離して、別本とされた結果、三本と云うことになったのである。

然し、『天下水陸路程』には、合刻される以前のテキストが残っている。わが内閣文庫に『一統路程図記』三冊として現存しているのがそれである。その巻頭に載せられた「一統路程図記序」には、左の如く記されている。

余家徽郡万山之中、不通行旅、不詣凶籍。土狭人稠、業多為商。汴弱冠隨父兄、自洪都至長沙、覽洞庭之

勝、泛大江遡淮揚、薄戾燕都。是年河水徹底、乃就陸行。自兗至徐、歸心迫切。前路渺茫、苦於詢問。乃惘然興感。恐天下之人、如余之厄於岐路者多也。後僑居吳會、与二京十三省暨辺方商賈、貿易得程圖數家。於是窮其聞見、考其異同、反覆校勘、積二十七年始成。帙分為八卷、卷有所屬。俾一展冊而道路之遠近、山川之險夷、及風波盜賊之有無、靡不洞其纖悉。九州地域、在指掌間矣。嗚呼宦軹之所巡、商泊所趨、訪履之所涉、庶此編為之旌導也。

隆慶四年庚午歲仲夏新安黃汴序。

勿論、合刻本には黄汴の序は載せられていない。合刻本に掲げられているのは、楊教授の校注本の『天下水陸路程』の卷末（二六六頁）にある「合刻水陸路程序」のみである。『一統路程図記』と『天下水陸路程』を比べてみると、本文には殆ど相異はない。ただ、印刷の都合上、割注の部分を行に改め、小字に組みかえているだけの相異である。書名が異なるのは恐らく出版書肆の判断によって、改題されたものであろう。前掲の黄汴の序でも明らかなように、『一統路程図記』は隆慶四年に刊行されたもので、『新安休寧約山黄汴纂、姑蘇南壕吳岫校正』と各巻の巻首に記されている。恐らく、『一統路程図記』は、隆慶四年

の初刊以降も、度々重版を繰返したのではなからうか。尚、合刻本にも校注本にも地図は収められていないが、『一統路程図記』本では、凡例（合刻本にはない）、目録に続いて、五丁裏から八丁裏まで「北京至十三省各辺路図」が掲げられている。更に、卷末には「一統路程図記後序」があり、校正者である吳岫が次の如く記している。

岫自幼有四方之志。後以無尺寸進取、乃遍索天下輿地志、儲而藏之。以為間居檢閱。徽友黃子京氏、足跡半天下。見前途問津者、湯皆迷茫、險夷利害、每犯所諱。故就岫假諸誌、創設規模。又以其坐壓在我蘇金閭闡闡之地、日与四方商賈交易、就而問詢、并己所嘗歷而識者、辯証之以成此書。積苦數十年而後成。可謂勤矣。是書也、士大夫得之可為四牲覽勞之資、商賈得之可知風俗利害。入境知禁、涉方審直、万里在一目中。大為天下利益、實世有用之書、与古輪軹使者方言等。岫因其請就塵外軒、一校正之乃入梓。子京氏亦世奇男子、与天下共利、有兼包物。我之志可謂仁、可謂賢矣。

隆慶四年庚午歲仲夏姑蘇南壕吳岫識。

右の如く、原刻本には黄汴の序、吳岫の後序があり、地図も付されているわけであるから、楊教授は校注本の編纂

に当って、合刻本を利用せず、原刻本を使用されたら、より有意義ではなかったかと考えられる。因みに、筆者の知る範囲では、原刻本は内閣文庫に収蔵されているのみである。尚、『国会図書館漢籍目録』には、「天下水陸路程一卷、朝鮮写、一冊」という記載があるが、筆者はまだこのテキストについては調査していない。

校注本の第三番目に収められているのは、清・憺漪子輯『天下路程図引』である。本書は、内閣文庫所蔵の『士商要覧』の巻一の部分を抽出したもののようである。校注本ではこれを二巻に分けているが、本来は一卷である。内閣本では巻二は「天時雜占」、その細目は、論風、論雲、論雷、論雨、論日、論月、論星、論節令、論氣候、論朔望支干、論山川地土、論草木魚鳥の十三に分れている。巻三は「士商規略、士商十要、買売機関」となっている。尚、巻一の巻首には「天都憺漪子輯定」と記し、更に巻三では又「天都憺漪子輯定」としている。因みに、『内閣文庫漢籍分類目録』では、本書を「清・憺漪子編」とし、楊正泰氏もこれを「清・憺漪子輯」と記している。処が、校注本の巻末（五一―四頁）に引用された「士商要覧序」に、前頁の如く記されている。

歳丙寅、余自楚中回新安。経白嶽黃山、撫景興徳、令人引千古幾憑欄之慨。既而憺漪子出〔士商〕要覧一

批評と紹介 山根

編、種々集自婆心。……

最後に「天啓丙寅歲鳴蜩月天都金声正希氏題於鳳山別業」とある。然らば、憺漪子が『士商要覧』を著述したのは、明の天啓六年のことになる。内閣文庫も校注本も、憺漪子を清人としているが、彼は明末清初の人だったのである。『士商要覧』が選述されたのは、勿論明末であつたし、『天下路程図引』も恐らくは、明末に刊行されたものであろう。

因みに、『士商要覧』はもともと九州佐伯藩の蔵書であつたらしく、後に昌平坂学問所へ移つたものである。『天下路程図引』にも、巻首に序文があつたらしく、校注本（五一―三頁）に引用されている。その序文は、「西陵 憺漪子」と署名されているから、『士商要覧』も『天下路程図引』も、共に憺漪子が編纂したことになるのかも知れない。

	校注本	士商要覧
第二行	逾直	迂直
〃	至五十三	至五十
〃	五十四至一百為大江	五十一至一百大江
第五行	合符其所見	各符其所見

第七十五卷 一四九

い。彼は『士商要覽』の中でも、最も実用性の高い「天下水陸路程図」の部分のみを抽出して、『天下路程図引』と名付けたわけである。校注本の「叙」を、『士商要覽』本のそれと比較すると、前頁の如き異同が見られる。

また『士商要覽』には、巻末に次の如き跋文が掲げられている。

予著斯言、為目擊經商艱于獲利、漸見消替、而牙儂日坐失業、益見困憊。所以人心不古、俗習澆漓、有□□法、雖淺近無文、其中意義、亦能曲盡賓主之弊、指人循道義、履中正、不溺慾海、挽回少補處世治家之万一耳。

以上の如く、『天下路程図引』は、『士商要覽』の第一巻を抜き出して、出版したもののようであるが、我々の研究にとって必要なのは、紀程・路程の部分よりも、寧ろ「天時雜占」や「士商規略」、「士商十要」、「買売機関」等の部分ではないかと思われる。それ故、『天下路程図引』ではなく、『士商要覽』を刊刻して頂ければ、我々にもっと有益なものになったのではあるまいか。

校注本の第二番目に収める『客商一覽醒迷』は、福建の商人、李晋徳（明人）の著わした書である。最初に述べたように、本書は楊教授が合刻本『客商一覽醒迷天下水陸路程』より抽出したものである。『客商一覽醒迷』の単刊本

は、現在国内外のいずれの図書館にも、その存在が確認されていない。楊氏の「前言」によれば、此の書は「從商の經驗と商人の訓戒を記述した專書である。それは商人の投牙・找主・定価・過秤・發貨・付款・索債・訟訴などの過程中で、まさに注意すべき重要部分を闡述し、天氣の変化を觀測し、出行の吉日を選択し、不良の輩を警惕し、人貨の安全に留意し、意外が発生するのを防止する經驗を紹介し、商人の必ず遵守すべき商業道德を總結し、必ず商人が自己修養を加強すべきことを告誡している。その他、また多數の經營、治家、理財方面の内容を含んでいる。……史料価値は甚だ高く、明代社会經濟、特に明代の商人を研究するのに、甚だ參考価値がある」としている。

『商賈一覽醒迷』の具体的な内容は次の如くである。校注本の目録（二六九頁）では、「商賈一迷醒迷目錄」とし、「覽」を「迷」に誤っている。最初に「商賈醒迷」があり、この部分が本書の大部分を構成している。その中に「悲商歌」三〇首、警世歌一六首をも付している。次に「警世歌」二四首を取める。これは「商賈覺迷」の中に含まれている警世歌とは全く別のものである。第三は「逐月出行吉日」で、第四は「憎天翻地覆時」、第五は「楊公忌日」、第六は「六十甲子逐日吉凶」となっている。但し、第二「警世歌」以下の本書に占める割合は極めて少い。

次に、楊教授による『天下水陸路程』および『天下路程図引』の解題を紹介しておきたい。「『天下水陸路程』は各種の程図と路引に依拠して編成した明代の国内交通指南である。それは二京十三布政司の水陸路程、各地道路の起訖・分合と水陸駅站の名称を詳細に記載し、食宿の条件、物産事情、社会治安、行会の特徴、船輪の価格等も、間々記している。前近代にあつては、程図と路引は士商の行旅にとつては必備のもので、黄汴の編纂した程図と路引は再三重印され、広く流伝していた。清末になつて、汽車、汽船、自動車相次いで使用され、国内交通路線に重大な変革を生じたので、この種の程図と路引も従来の社会的効用を喪失した。わが国の旧史志は往々交通路線の記載を軽視しており、明史地理志も水馬駅站を載せておらず、明会典もただ駅名を載せて、駅路を載せず、その他の地志・專書も駅站と交通路線を記載するのみで、この種の程図や路引には詳しくはふれていない。文獻価値と史料価値は甚だ高いので、近年、この種の程図や路引は、中外学者の重視と研究を引き起している」。

『天下路程図引』は「西陵・儋漪子の輯で、明の天啓六年に刊行され、現在上海図書館に収蔵されているが、やはり稀有の本である。本書は明代の水陸路引一百条を滙集し、水陸路線の站名、里距を主とし、兼ねて各地の食宿・物

産・氣候・風景・古蹟等の内容に及んでいる。読者に地名を熟記させる為、また多く地名をよみこんで作成した詩歌、例えば京都九門詩、水程捷要歌、吉安九鼎詩等を収録しており、甚だ特色がある。『天下路程図引』と『天下水陸路程』に輯録した路引は相異する処も多く、よく相互に補充しあい、相互に参照することができる。これらの路引は明代の国内主要の水陸路線の分布状況を反映している」。

楊教授の解題は以上の如くであるが、この校注本の最大の特徴は、テキストに校訂を加え、注釈を施したことである。「客商一覽醒迷」は孤本で、参校すべきテキストがないから、ただ「他校」をなし、注釈を施したのみと云う。『天下水陸路程』と『天下路程図引』には、「本校」あり、「他校」あり、更に「注釈」を加えた、と云う。校注の方法は次の如し。

(1) 『天下水陸路程』と『天下路程図引』の校注は、「他校」を主とし、「理校」を次とした。やむを得ぬ時は「本校」をなした。但し、参校すべきテキストに善本がなく、衍脱・訛舛の処も往々底本と同じなので、甚だ錯誤が多い。

(2) 『天下水陸路程』と『天下路程図引』には二万余の地名を記載しているが、原書の地名は音訛、形訛が甚だ多い。今回の整理には、悉く明会典、明史河渠志・地理

志・寰宇通志、讀史方輿紀要の諸書を規準として、原書の地名に対して校訂を行ない、原書の地名の前後不統一や、各巻各表現法の弊端を訂正する。

(3) 布政司・府・州は古今名称が異なるか、或いは治所の異なる県・衛・所・水馬駅は、すべて現在の地名を注記する。その余の小地名で、参考すべき文献図籍がないものは、校注をつけない。一般情況下で、最初に出てきた地名には、皆な現在の地名を注釈する。以後、再出した場合は、注釈を加えない。

(4) 『天下水陸路程』の原刊『一統路程図記』は最初、隆慶四年に刊行され、二書の内容巻帙は同一なので、校記はただ書名を記すのみで、巻数は注記しない。

(5) 『天下路程図引』は、『土商要覽』と程春宇『土商類要』に原載する「水陸路引」の部分と同一である。その源流関係については後考を俟つも、『天下路程図引』は、恐らくは『土商類要』水陸路引部分の輯本と思われるので、校記にはただ書名を列し、巻数を注さなかった。

右に引用した「凡例」の中で、楊教授は「他校」「本校」「理校」などの用語を使用している。わが国の書誌学では用いられない術語なので、その意義は明確でないが、「他校」は、他に校合すべきテキストがない場合、関連のある書と対校することを指すようである。「主考」は対照すべ

きテキストがあり、それと校合する場合を意味し、「理校」とは前後の文の関係より推察して、校訂する場合を指すのであろう。楊教授が校訂、注釈に当って最も苦労したのは、地名に注を付することにあったようである。『天下水陸路程』および『天下路程図引』に出てくる地名には、殆ど洩れなく注釈を施している。その際、楊氏は『明会典』『明一統志』『寰宇通志』『明史地理志』『讀史方輿紀要』等を主として用いられており、稀に地方志を使用している場合もある。二万余にのぼる地名に、一々注釈を加えることは実に労の多い作業であつたと思われる。楊教授のこの大変な御苦労に対して、心より敬意を表したい。

校注本に収められた三種の書の中、『客商一覽醒迷』は他にテキストがないのだから兎も角、『天下水陸路程』については、『一統路程図記』に拠って、合刻本には欠けている序文や跋文を補って頂きたかつた。『天下路程図引』二巻については、むしろ『土商要覽』三巻を取めた方がはるかに有益だつたのではないかと思われる。前述の如く、同書は巻一「天下水陸路程」よりも、巻二「天時雜占」、巻三「土商規略」「土商十要」「買売機関」の方が、筆者にとつてははるかに興味ぶかいものがある。『土商要覽』を取録して頂いた方が、より学界を裨益したのでなかつたかと考えられる。

今までわが国でも容易に手にすることのできなかつた「紀程、路程」の書が、こうして活字本になって、我々の前に提供されたことは、本当に喜ばしい次第である。然し、同種の書として、内閣文庫には他にも明・陶承慶『新刻京本華夷風物商程一覽』二卷（明刊、劉氏喬山精舎）、『新鐫路程要覽』二卷（清刊）、清・陳其楫『天下路程』三卷（清乾隆六年刊）、清・頼盛遠『示我周行』三卷（清刊）等の諸書がある。私事にわたるが、三〇余年前、古典研究会が発足した当時、筆者はこれらの紀程、路程の書を複製することを長沢規矩也博士に提案したことがあった。長沢博士はこれらの諸書は俗書であるから、複製する必要はないとされ、結局複製は実現されなかつた。それから三〇余年を経た今日、楊正泰教授によって、その一部が活字本として刊行されたことは、筆者にとつてやはり嬉しいことである。

（一九九二年九月、山西人民出版社、太原、A五判、五一四頁）

南炳文著

南明史

山根 幸夫

南明史には、古くは謝国楨『南明史略』（上海人民出版社、一九五七）があり、更に A. Struve: The Southern Ming 1644-1662 (イェール大学出版部、一九八四) もあるが、今般、南炳文教授の『南明史』が刊行されたことはまことに喜ばしい次第である。南教授は、さきに湯綱教授（復旦大学）と共著で『明史』上・下（上海人民出版社、一九八五、九一）の大冊を出版したことは好く知られている。今般、その補篇として『南明史』を世に問われた。本書後記によれば、南教授は「本書はもと私と湯綱先生が合撰した『明史』（下）の一部分であったが、上海人民出版社の劉伯涵先生の鼓勵をうけ、これを摘出して改寫し、単行本として出版した」と述べられている。それ故、本書はもと『明史』（下）の最後の部分を構成していたが、それを分離して一冊の『南明史』としたものである。

本書は、明朝が李自成の農民軍によって亡ぼされた一六